

E-2

「自分」の再帰用法と述語の意味制約

小栗 哲哉 (大阪大学)

1. はじめに

・「自分」の再帰 (reflexive) 用法と述語の意味制約

- (1) a. 太郎が自分を {責めた / ??殴った / *殺した}。
b. 花子は自分にチョコレートを {買った / ??送った / *渡した}。

→(1a): 「直接再帰 (direct reflexive)」, (1b): 「間接再帰 (indirect reflexive)」 (Kemmer 1993)

- (2) 「自分」の再帰用法: 「自分」が先行詞と同一述語の項 (co-argument) となる時の用法。

・「自分」の視点 (viewpoint) 用法・話者指示 (logophoric) 用法 (廣瀬 1997, Hirose 2002, 2014; cf. Oshima 2004)

- (3) a. 太郎_iは [花子が自分_iを殴った時] 別の女の子のことを考えていた。 [視点用法]
b. 太郎_iは [次郎が自分_iを殴った] と思った。 [話者指示用法]

(4) 目的

再帰用法の「自分」が直接目的語・間接目的語として生じる場合の振舞いを観察し、どのような述語と共起できるのかを明らかにすること。

(5) 主張

- a. 再帰用法の「自分」は、無標の場合、先行詞と(i) 時空間的に同じ位置に投錨される、(ii) 非意識的存在を表す。
b. (a) の語彙的特性と適合する出来事を表す述語が再帰用法の「自分」と共起できる。

2. 先行研究

2.1. 動詞意味論的アプローチ - 物理的 vs. 抽象的行為

- (6) 物理的行為 (physical action) を表す述語は再帰用法の「自分」が容認されないが、抽象的行為 (abstract action) を表す述語は容認される。 (Ueda 1984, Aikawa 1999)

→ (1a): 「自分を責める」 vs. 「自分を殴る・殺す」

[問題] 物理的行為でも容認される事例: 「自分を刺す」「自分を撃つ」

- (7) a. 太郎はナイフで自分を刺した。
b. ジョンはピストルで自分を撃った。 (Kitagawa 1986:382)

→ 「物理的」「抽象的」という区別では、再帰用法の「自分」と共起する述語の範囲を規定できない。

2.2. 名詞意味論的アプローチ - 意識主体と自己

・意識主体 (Subject) と自己 (Self) (廣瀬 1997, Hirose 2002, 2014; Lakoff 1996, Lakoff and Johnson 1999)¹

- (8) a. 人は、(概念的に)[意識主体 (Subject)] と [自己 (Self)] に分けられる。
b. 意識主体: 意識の在り処。知覚・意識・判断などの主体。

¹ 以下では、便宜上「意識主体」「自己」を[]で表し、意味役割を<>で表す。

- c. 自己: 人から意識主体を除いた残りの要素 (e.g. 身体、社会的役割、性格、過去の発言や行い)。



図1 Subject-in-self (e.g. *He sat himself down.*)

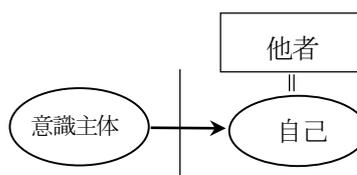


図2 Self-as-other (e.g. 彼は自分を見つめ直した。)

- (9) The reflexive use [of *zibun*] represents the **objective self** of the agent of an action, i.e. the self that the agent (not the speaker) *dissociates* from his consciousness and treats like another person. (Hirose 2014:101)

・再帰用法の「自分」は、[自己] が [意識主体] から切り離され、客体化される状況において容認される。²

- (10) a. ?? 太郎は自分を殴った。 (「自分」=e.g. 自分の身体) →図1
 b. 太郎は自分を責めた。 (「自分」=e.g. 自分の欠点・失敗) →図2

[問題] (7) の物理的的行為の場合、[自己] (肉体) は [意識主体] を内包していると捉えられる。

[解決すべき問い]

- (11) 容認可能となる述語の意味的特徴は何か。特にどのような物理的的行為を表す述語が容認されるか。

[本発表のアプローチ]

- (12) a. 再帰用法の「自分」が成立するためには、「自分」の ([自己]としての) 語彙的特性と述語の参与者に関する意味的特性の両者が関わる。 [動詞意味論と名詞意味論の折衷的アプローチ]
 b. 直接再帰だけでなく間接再帰を表す述語の振舞いを観察することによって、(a) を示す。

3. 提案

- (13) a. 再帰用法の「自分」は、[意識主体] と区別される [自己] を表す。自己が [意識主体] を内包する場合もあれば、自己が意識的主体から切り離される場合もある (cf. 廣瀬 1997, Hirose 2002, 2014).
 b. 再帰用法の「自分」は、無標の場合、先行詞と(i) 時空間的に同じ位置に投錨される、(ii) 非意識的存在を表す。
 c. (b) の語彙的特性と適合する事態を表す述語が、再帰用法の「自分」と共起。

(i) 「自分」は無標では先行詞と同じ時空間的性質をもつ実体を表す (cf. Ikawa 1999, Rooryck and Vanden Wyngaerd 2011)。

² Hirose(2014) の分析は、物理的的行為を表す述語であっても「-自身」「自分で」の生起によって容認される事実 (McCawley 1972) をも説明する (Hirose 2014:106)。

(i) a. 健は 自分自身を {殴った / 叩いた / 蹴った}。

b. 健は 自分で自分を {殴った / 叩いた / 蹴った}。

上記の表現は「他者との対比」の機能を持ち「他者と同列に扱われる自己」を表すため、「客体的自己」同様「自分」が容認可能とされる。

(14) a. * 今日私は自分ではない。 (cf. I'm not myself today. (Lakoff 1996))

b. 今日私はいつもの自分ではない。

(15) あの子は*(家での)自分とは別人になった。

(ii) 「自分」は無標では非意識的実体 (non-conscious entity) としての [自己] を表す。

(16) a. * 太郎は目覚まして自分を起こした。

b. のび太は未来から来た自分を殴った。 / ジキルは別人格の自分に怯えていた。

[=別の意識を有する実体] (cf. Jackendoff 1992)

4. 時空間的同一性

4.1. 間接再帰

・因果連鎖 (Talmy 2000, Croft 1991) における始点と終点が異なる場合、再帰用法の「自分」は容認されない。

(A) 因果連鎖の始点と終点が異なる位置にあることを要求する二重他動詞 (使役移動)

(17) a. 手紙を送る / ボールを投げる // 伝言を伝える / 英語を教える [送付動詞 / 伝達動詞]

b. 荷物を運ぶ / 手紙を届ける // プレゼントを渡す / お金をあげる [運搬動詞 / 授与動詞]

(18) a. ?? みね子は自分に{手紙を送った / ボールを投げた // 伝言を伝えた / 英語を教えた}。

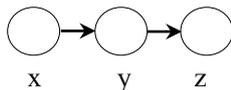
b. * 時子は自分に{荷物を運んだ / 手紙を届けた // プレゼントを渡した / お金をあげた}。

(B) 因果連鎖の終点の時空間的な位置が無指定である二重他動詞 (潜在的な所有移動)³

(19) プレゼントを買う // 夕飯を作る // 再起を誓う [獲得動詞 / 作成動詞 / 所有見込動詞]

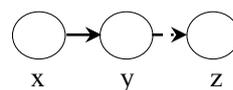
(20) 省吾は自分に{プレゼントを買った // 夕飯を作った // 再起を誓った}。

(21) a. (A)タイプ二重他動詞のイベント・スキーマ



{time_i, place_i} {time_j, place_j}

b. (B)タイプ二重他動詞のイベント・スキーマ



{time_i, place_i} {time_u, place_u} [u: 無指定]

→ 「自分」が表す [自己] は [意識主体] と同一時空間的位置に投錨されるため、始点と終点で異なる位置が要求される因果連鎖とは相容れない。

[証拠 1] 因果連鎖の始点を起点として明示できるかどうか

(22) a. 太郎から花子に手紙を送った。

b. ?? 花子から太郎に時計を買った。

[証拠 2] <主題>の移動先が現実には存在しない場合

(23) a. # 太郎は昨年亡くなった母に{花を渡した / 小包を送った}。

b. 次郎は (墓前に供えるため) 昨年亡くなった父親に{花を買った / 追悼文を書いた}。

³ <受益者>二格で標示するだけでは容認しにくいと判断する話者もある (岸本 2001 を参照)。本発表では比較的容認可能なものとして扱う。

・時間領域を限定する連体修飾を受ける場合 (cf. 西山 2003)、再帰用法の「自分」が容認される。

- (24) a. 太郎は3年後の自分に手紙を{送った / 出した}。
 b. [高齢者が過去の自分にビデオレターを送る番組] の中で、茨城県在住の 76 歳の男性が 24歳の自分に語りかけた場面。...「俺の人生の中で一番愛していたのがハナちゃんだ。そして最も好きだったのがハナちゃんだ。よろしく伝えておいてくれ」と過去の自分に伝えた男性。 (Open Web)

(C) 因果連鎖の始点と終点が重なる二重他動詞 (逆行使役移動)

- (25) a. そしたら福山さんが吹石さんの腰を自分に抱き寄せて、「家内です」っていう訳。 (Open Web)
 b. 結局、悪い運を自分に引き寄せていただけだったわ。 (BCCWJ)
 (26) * 福山さんが吹石さんの腰を田中さんに抱き寄せた。

(D) 因果連鎖の終点のみを指定し、経路が背景化された二重他動詞 (位置変化)

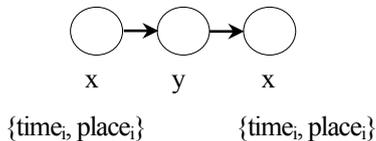
- (27) 太郎は自分に{バッジをつけた / 香水をかけた / 薬を塗る}。
 cf. 太郎は壁にクリスマスの飾りをつけた。

・方向を表す「(の方)へ」が容認されない (着点指向性)。

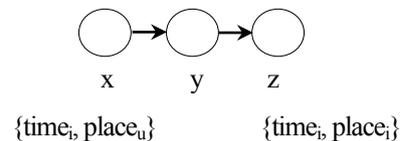
- (28) ?? 太郎は花子(の方)へ{バッジを付けた / 香水をかけた / 薬を塗った}。

→「移動の着点」として<場所>のみを要求し、それまでの経路は背景化される。因果連鎖の始点と終点の対立関係も背景化されると考えられる。

(29) (C)タイプ二重他動詞のイベントスキーマ



b. (D)タイプ二重他動詞のイベントスキーマ



4.2. 直接再帰

・間接再帰での分析を応用すると、直接再帰の述語の振舞いも因果連鎖の始点 (<動作主>) と終点 (<被動作主>) の時空間的關係によって捉えられる。

(A) 因果連鎖の終点が、始点とは異なる位置に存在することを要求する他動詞

- (30) ?? 太郎は自分を{殴った / 蹴った / ぶった}。 [打撃動詞]
 (31) a. * 次郎は自分を{押した / 突き飛ばした / 壁にぶつけた}。 [対象への一方向的な働きかけ]
 b. * 三郎は自分を{風呂に入れた / 部屋から出した}。 [ある場所から別の場所への対象の使役移動]

・「見る」の方向性

- (32) a. 太郎は鏡で自分を見た。 [自分 (の鏡像) = 空間的に異なる位置にある“自分”]

b. ?? 太郎は鏡を使わず直接自分を見た。

(B) 因果連鎖の終点が、始点とは異なる位置に存在することを要求しない他動詞

(33) 拓哉は自分を{責めた / ほめた / けなした}。

(34) 拓哉は昨年亡くなった父を {責めた / ほめた / けなした}。

(C) 因果連鎖の終点が始点と重なる他動詞

(35) a. 山田は自分をナイフで刺した。

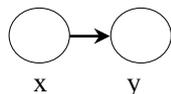
b. 木村は自分を銃で撃った。

・<道具>項は、自己にも他者にも向けることができる。

(36) a. 山田はナイフを{自分 / 太郎}に向けて、刺した。

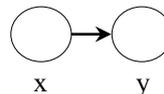
b. 木村は銃を{自分 / 次郎}に向けて、撃った。

(37) a. (A)タイプ他動詞のイベント・スキーマ



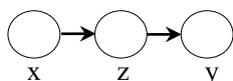
{time_i, place_i} {time_j, place_j}

b. (B)タイプ他動詞のイベント・スキーマ



{time_i, place_i} {time_u, place_u}

c. (C)タイプ他動詞のイベント・スキーマ



{time_i, place_i} {time_u, place_u}

4.3. まとめ

| 述語クラス | 間接再帰 | | | | 直接再帰 | | |
|---------------|--------|------------|-------|------------|--------|------------|------------|
| | A | B | C | D | A | B | C |
| 始点と終点の 関係性 | 始点≠終点 | 始点 =or≠ 終点 | 始点=終点 | 始点=終点 | 始点≠終点 | 始点 =or≠ 終点 | 始点 =or≠ 終点 |
| 再帰用法の 「自分」 | ?? ~ * | OK | OK | OK | ?? ~ * | OK | OK |
| 例 | 送る・渡す | 買う・作る | 抱き寄せる | つける かける | 殴る・押す | 責める ほめる | 刺す 撃つ |

表1 再帰用法の「自分」と述語の意味クラス

5. 非意識者性

・先行詞との時空間的位置関係で説明できない事例

(38) a. * 太郎は自分をナイフで (刺し) 殺した。

b. * 花子は毒を飲んで自分を殺した。

・再帰用法の「自分」は意識主体とは区別される [自己] を表すので、非意識的存在として解釈される。

- (39) a. * 太郎は目覚ましで{自分 / 死人 / 岩}を起こした。
b. * 太郎は{自分 / 死人 / 岩}を説得した。
- (40) * 太郎は{死人 / 岩}をナイフで (刺し) 殺した。

[証拠 1] 意識的参加者を<被動作主>項として選択する場合、抽象的行為でも容認されない。

- (41) ?? 花子は自分を{怒らせた / 悲しませた / 喜ばせた}。

[証拠 2] 使役文や受動文では容認されない。

- (42) a. * 太郎は自分を立たせた。
b. * 次郎は自分を病院まで歩かせた。
- (43) a. * ジョンは自分に (よって) ピストルで撃たれた。
b. * ジョンは自分に (よって) 刺された。

・被役者項と受動文の動作主項は、意識的参加者でなければならない。

- (44) a. * 店長は、マネキンをショーウィンドーに立たせた。 (高見 2011:148)
b. [警官はつまづいて、ジョンの死体が握っていたナイフの上に転倒した。]
* 警官は死んだジョンにナイフで刺された。

6. 結論

- (45) a. 再帰用法の「自分」と共起可能な述語は、(i) 因果連鎖の始点と終点が時空間的に同じ位置として解釈可能で、かつ (ii) 意識的参加者を終点に要求しない場合に容認可能となる。
b. これは再帰用法の「自分」が [自己] として、先行詞と (i) 時空間的に同一の位置に投錨され、(ii) 非意識的参加者と解釈されるためである。
c. 述語の自己指向性・他者指向性 (Haiman 1980, König & Siemund 2000 など) は、日本語においては、(i) 事態における参加者の時空間的特性と (ii) 意識性 (consciousness) によって特徴づけられる。

参考文献

- Aikawa, T. 1999. "Reflexives," *The Handbook of Japanese Linguistics*, 154-190. / Croft, W. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. / Haiman, J. 1980. "Iconic and Economic Motivation," *Language* 59, 781-819. / 廣瀬幸生. 1997. 「人を表すことばと照応」『指示と照応』1-89. / Hirose, Y. 2002. "Viewpoint and the Nature of the Japanese Reflexive *Zibun*," *Cognitive Linguistics* 13, 357-401. / Hirose, Y. 2014. "The Conceptual Basis for Reflexive Constructions in Japanese," *J. of Pragmatics* 68, 99-116. / Ikawa, H. 1999. *Events and Anaphoric Processes*, PhD diss. / Jackendoff, R. 1992. "Mme. Tussaud Meets the Binding Theory," *NLLT* 10, 1-31. / Kemmer, S. 1993. *The Middle Voice*. / 岸本秀樹. 2001. 「二重目的語構文」『動詞の意味と構文』. / Kitagawa, Y. 1986. *Subject in Japanese and English*, PhD. diss. / König, E. & P. Siemund. 2000. "Intensifiers and Reflexives: A Typological Perspective," *Reflexives: Forms and Functions*, 41-74. / Lakoff, G. 1996. "Sorry I'm Not Myself Today," *Spaces, Worlds, and Grammar*, 91-123. / Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh*. / 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論』. / McCawley, A. N. 1972. *A Study of Reflexivization*, PhD diss. / Oshima, D. Y. 2004. "*Zibun* Revisited," *University of Washington Working Papers in Linguistics* 23, 175-190. / Rooryck, J. & G. Vanden Wyngaerd. 2011. *Dissolving Binding Theory*. / Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics Vol. 1*. / 高見健一. 2011. 『受身と使役』. / Ueda, M. 1984. "On a Japanese Reflexive *Zibun*" ms., U. of Massachusetts Amherst.

[コーパス] 『現代日本語書き言葉均等コーパス』(BCCWJ)